

天遊 大阪教育大学広報誌 Ten You

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

Winter 2020 Vol.52

授業探訪

教師冥利に尽きる
エッセイ・恩師への手紙募集

ラボ訪問

STUDENTS NOW!

BAGの中身

附属学校園ウォッチ

ゼミ室こぼれ話

TOPICS



特集

新型コロナウイルス 感染症への対応について



 YouTube **OKU Channel**

インタビューやイベントの様子など動画を随時更新中!
チャンネル登録してね!



国立大学法人
大阪教育大学

大阪教育大学の 新型コロナウイルス 感染症への対応について

人々の生活様式さえ変えてしまった新型コロナウイルス感染症。在学生や教職員の安全と安心を確保するため、本学はあらゆる対応を行ってきました。感染の拡大が始まった2020年2月から10月までの対応と、キャンパスにおける新型コロナウイルス感染拡大防止に係る取組を紹介します。

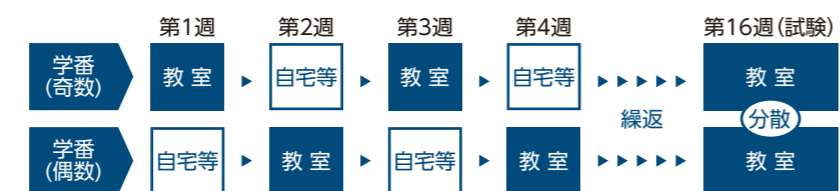
1 授業における新型コロナウイルス感染症対策



ハイブリッド授業

後期の授業において、一部の授業科目では講義室の対人距離を確保し、キャンパス内に滞留する学生の総数を減らすために、学籍番号末尾の奇数と偶数により2グループに分けて、キャンパス内で受講する対面授業と自宅等で受講するオンライン授業を交互に組み合わせて行うハイブリッド授業を実施しています。

●ハイブリッド授業実施イメージ



対面授業

受講人数が少ない授業や、オンラインでの実施が難しい実験・実技・実習を伴う授業においては、各授業で消毒の実施や三密を回避する等、新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で実施しています。一部の音楽実技系の授業では、担当教員と学生が協力して、譜面台等を活用した手製のパーティションを作成し、対策を講じています。

2 コロナ禍での学生への支援

キャリア支援センター 修学支援センター (障がい学生修学支援ルーム)

パーティションを隔てたアドバイザーとの対面相談や、Zoom等のビデオ会議システムを活用したオンライン相談も実施し、コロナ禍においても就職支援を継続しています。

聴覚に障がいのある学生に対して、「CaptiOnline(キャプションライン)」というソフトウェアを活用し、授業中の教員の発言や様子等を支援協力学生がオンラインで文字情報に変換することで情報保障を行っています。



3 施設における感染予防に係る取組



マスク着用を促すポスター



授業実施時に使用する消毒セット



席数が制限されたテラス席



足元に並び位置が示された窓口



感染予防方法が図示された手指消毒液



トイレ前に設置された消毒セット



間隔をあけさせるための掲示



学内の感染対策が示されたMAP

これまでの対応の経緯

2月	19 中国から帰国・入国した場合の対応について通知 21 学生の課外活動を行う上での注意について通知(第1報) 27 本学主催イベントにおける延期・中止の対応について通知 28 附属学校の休校措置対応について通知 28 学生の課外活動の中止を要請(第2報)
3月	9 学位記・修了証書授与式の中止について通知 10 入学式の中止について通知 19 学生の課外活動の中止を引き続き要請(第3報) 24 卒業生・修了生への学長メッセージを掲載 30 学生の課外活動について一部緩和することを通知(第4報) 31 新型コロナ対応における本学の教育活動等の考え方について通知 31 インターネットを活用した授業実施方針について通知(第1報)
4月	6 学生の課外活動の禁止を通知(第5報) 7 入学生への学長メッセージ(動画)を公開 9 大阪府の緊急事態措置を受けた入構制限を通知 10 インターネットを活用した授業に向けた準備を要請 16 緊急事態宣言を受けた入構制限を通知 20 インターネットを活用した授業開始 22 インターネットを活用した授業実施方針について通知(第2報) 23 前期授業についての学長メッセージ(動画)を公開 23 免許状更新講習の第1期分の中止を通知
5月	7 大阪府の緊急事態措置延長を受けた入構制限期間の延長を通知 12 給付型奨学金などの学生への経済的支援の募集を開始 15 大阪府からの施設使用制限の要請が解除されたが、引き続き入構制限を行うことを通知 22 新型コロナ感染拡大防止を目的とした本学の活動基準を通知 22 学生支援緊急給付金事業の1次募集を開始
6月	1 学生による教育実習を再開 8 対面授業実施にあたる留意事項を通知 15 対面授業の一部開始 15 対面授業開始にあたってのお願いを通知 15 学内施設の感染対策MAP(6/15ver.)を掲載及び掲示 23 オープンキャンパスをWeb上で開催することを通知 30 課外活動実施指針(第1版)を策定及び通知
7月	1 学生の課外活動を再開 6 学生支援緊急給付金の2次募集を開始 29 後期の授業実施方針の決定予定を通知 29 大阪モデル イエローステージ(警戒)の対応方針に基づく要請について通知 31 新型コロナ感染拡大防止を目的とした本学の活動基準を改訂
8月	1 課外活動実施指針(第2版)を策定及び通知 23 Webオープンキャンパスを開催
9月	2 課外活動実施指針(第3版)を策定及び通知 3 ハイブリッド授業導入を含めた後期の授業実施方針を通知 24 後期授業についての学長メッセージを掲載 30 新型コロナ感染拡大防止を目的とした本学の活動基準を改訂
10月	1 ハイブリッド授業を含めた後期授業を開始 1 学内施設の感染対策MAP(10/1ver.)を掲載及び掲示 19 大学祭(神霜祭)のオンライン開催を決定 20 学位記・修了証書授与式をキャンパスで開催する旨を通知

学生への 経済的支援

多くのご支援をいただきありがとうございました

本学は、家計が急変した学生等に対する大学独自の奨学金制度として、「大阪教育大学修学支援奨学金(家計急変採用)」を創設しました。これは、学生等への支援及び教育研究支援の推進等を図ることを目的とする「大阪教育大学基金」を原資とし資金拠出したものです。また、今回の実施にあたって、基金には、新たに一般の方や卒業生をはじめ、学内研究室の同窓会組織や学内教職員からも支援が集まりました。同基金を原資として、学生への図書の手送サービスや、学内での学生アルバイトの支援策に活用しました。今後も、経済的困難な状況に陥っている学生の支援を続けていく予定です。

大阪教育大学 修学支援基金へのご寄付

※2020年10月31日時点(現在も募集中)

219件 / 26,536,000円

修学支援基金から拠出

118件 / 1,180万円

修学支援奨学金 (家計急変採用)

家計急変により経済的困難な状況に陥っている学生を対象に10万円の現金給付

89件 / 15万円

学内ワークスタディ

アルバイト先の休業等で経済状況が悪化した学生を対象に、学内での業務を創出し募集

214件 / 18万円

図書の郵送サービス

大学への入構禁止期間中における、附属図書館の図書を郵送により学生へ貸出

1,197件

2020年度前後期分 授業料の徴収猶予

経済的理由より、修学が困難であると認められる学生に対し、規定の申請により授業料の徴収を猶予



国語Ⅱ(書写)

教員養成課程 美術・書道教育部門

瀬川 賢一 准教授

「国語Ⅱ(書写)」を受講する学生たちが、講義室の最前列の机に着座した美術・書道教育部門の瀬川賢一先生のもとに、新型コロナウイルス感染症対策のため十分な距離を取って1列に並んでいます。並んでいる学生たちは、前週に配信されたオンライン授業を受講した際に出された課題と向き合い、各々が毛筆で書いてきた半紙を抱えています。

この日は、後期初めての対面授業。瀬川先生は、学生の書を見て、添削しながらコミュニケーションを図ります。「今回のポイントは『起筆』と『終筆』で、筆をドンと押さえること。これができていたら二重丸。『筆を立てて書く構えがしっかりできています』縦画は横画と違って肩と肘の2点を使いながら書く必要がありますが、それは小学3年生には難しい。でも、元から線があれば、その上を筆でなぞろうとして自然と身体がついてくる。そのために、半紙を二つ折りにして縦の折り目を付ける手立てを取ってほしい」「書いているときに半紙が破れたら、子どもたちにどう指導すればよいか。しっかり半紙を筆で押さえると破れることがある。紙の性質上、仕方がない。だから、『これだけしっかり筆で押さえることができた』と逆に褒めてあげたい」。小学生への指導法を交えながら、学生一人ひとりが持参した書のできているところ、できていないところを的確に伝えていきます。時折、書から窺える学生の性格等を言い当て、学生たちから笑いを取り、授業の雰囲気や和ませます。

前週に実施されたオンライン授業では、瀬川先生が「小学校学習指導要領では『毛筆を使用する書写の指導は、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導する』と記載されています。平時と変わらず書きやすい手で書く、ということによってよいかと思えます。学校現場に出て、学習指導要領に則った指導を心掛けてください」と語りかけます。小学校の授業同様、硯や下敷きの位置、姿勢や筆の持ち方等の書写の基本についてカメラに向かって説明し、書き方の説明時は手元を書き手目線で写している映像が配信されました。

「書写は実技なので基本的には対面での授業を行いたいと思っています。書いてあるときの空気感を共有したいし、実際に筆を動かしているところを見て、その上で書の添削を行うことはすごく大事。しかしながら、このコロナ禍を含めどんな状況においても、できる範囲のことをベストな方法を模索しながら実施することが大切だと思います。現時点では、オンラインで書き方を学んで書写の課題に取り組み、次週に対面で添削を行う方法で実施しています」

この授業は、小学校教員の免許取得に関わって、受講する必要があります。小学校教員に必要な書写技能に限らず、児童・生徒にどんな言葉かけをすると理解してもらえるのか、といった指導のポイントも重要視されており、学生にもそのことを大切にもらいたいと瀬川先生は言います。「半年間の15回の授業の中で、学生が互いに『この点ができています』と褒め合うことができ、『上手い』『下手』という言葉が無くなったら成功だと思っています。そうやって、その字を書く上で『これ大事だな』と思ってくれたら、教壇に立ったときに子どもたちへの



関わり方や褒め方が変わってくる。目の前の子どもたちが『わかった』『できた』と思う瞬間が教員としての醍醐味であり、子ども達とそれを共有できることこそ、教育者としてプロと言えるのではないのでしょうか。教員という仕事は、そういうことだと思います。授業を行う際には、将来関わることになる子どもたちに対して、どうあってほしいかをいつも考えています」

これからも瀬川先生の授業「国語Ⅱ(書写)」では、添削や声かけを通して、『字を書くこと』について学生たちが互いに考え、まだ見ぬ子どもたちとの関わりを思い描き続けます。

【授業DATA】

対象学年：学部1・2回生
主な対象学生：学校教育教員養成課程
開講期：2020年度後期 火曜1限

物質化学実験Ⅰ

教育協働学科 理数情報部門 堀 一繁 准教授

「物質化学実験Ⅰ」を受講する学生は、安全面を配慮してゴーグル、白衣を身に付け、授業開始前にも関わらず、ガスバーナーで湯を沸かしたり、実験器具の用意をしたりと、効率よく実験を進めるために準備を進めます。

授業開始時間となり、理数情報部門の堀一繁准教授が今日行う実験の説明を始めます。今回は、第2族A陽イオンに分類される銅・カドミウムイオンの性質の理解や薬品の取扱法などの習熟を目的に、それぞれのイオンの検出、及び分離する実験を行います。「弱酸性で硫化水素を通じて沈殿するのが第2族。今回の実験で扱う試薬は危険なものが多いので、最後まで気を抜けません。カドミウムは昔のイタイイタイ病の原因物質です。また、毒性が強い硫化水素を使います。温泉や火山で発生していることが多く、卵の腐った臭いがするもの、例えばイメージがつくでしょうか」危険を伴う実験ということで、講義室全体に緊張が走り、学生はより一層先生の説明に耳を傾けます。

その後も「アンモニア水も臭いを嗅がないように注意してください。昔は『気付け薬』にも使われていたぐらいなので、大変なことになります。僕はどちらかというと好きな臭いですが」とジョークも挟みながら、かつ「その先の実験操作で失敗することも想定し、この溶液は余裕をもって作っておいた方がいいと思います」とリスクマネジメントも踏まえながら実験の説明を進めます。

授業を行う際は、学生が理解しやすいように、身の回りの事象などと結びつけることができる具体例を示しながら説明するように心がけているとのこと。「学生が正確に理解できるかを意識しながら、授業の資料を作ったり、話し方を考えています。理解の確認の1つの手段として、実験を行った1週間後にレポートを提出させ、その内容を確認し添削したうえで、次の週にすべて返却するようにしています」

実験は2人1組で行います。学生は実験操作一つ一つに対して、「反応させるためには、もう1滴入れた方がいいかな?」「赤色が消えて青色になるまでってということだけど、これは青色と言えるのかな?」などと話し合いながら実験を進めていきます。「社会に出てからも1人で仕事をする事は少なく、チームで動くことが求められます。だから、他の人と協力しながら実験を進めてほしい。そういう意味でこの授業は、教育協働学科がめざしている“協働力を身に付ける”要素も含まれています」と語ります。

実験に取り組む学生の顔は真剣そのもの。危険な試薬への警戒はもちろんですが、この実験操作の意味や、なぜこの結果になったのか?という化学への探究心に駆られています。溶液の色が変わる瞬間や、思っていたとおりの反応が起きたときには、笑顔が溢れます。実験終了後は、実験結果や考察をノートに書き込み、堀先生に見せに行きます。「なぜそうなったのか」「なぜこう考えたのか」と投げかけられ、実験が終わっても事象への探究はまだ続きます。

「この授業は、教員免許取得の必修科目として位置付けられており、かつ1回生の学生が対象です。基本的なことかもしれませんが、入試で出される問題の



答えとして知っている事象を実験で体験することで、それを知識として定着させること。さらに、卒業するまでに大量に書くことになる実験レポートの書き方の習得を通して、自分の思い込みや感情を切り離し、実験事実を客観的に見る目を養うことをめざしています」

学生たちは引き続き、チームで多くの実験に取り組み、様々な“なぜ?”に真剣に向き合い、わかる楽しさを満喫しながら、化学に関わるあらゆる事象への理解を深めていくことでしよう。

【授業DATA】

対象学年：学部1回生
主な対象学生：教育協働学科理数情報専攻自然科学コース
開講期：2020年度後期 火曜4限・5限

『教師』の魅力向上プロジェクト 教師冥利に尽きる エッセイの公開・活用

教師の魅力を発信し、教師になりたい人を増やし、素晴らしい教師を増やす

教師という職業のやりがいや素晴らしさを世界に向けて発信し、教師をめざす者を一人でも多く増やすことを目的に、教職等経験者から「教師冥利に尽きるエッセイ」を募集しています。

募集期間が
残り1か月
を切りました!

応募締切
令和2年
12/31
木まで

はい

あなたは
教職等経験者?

いいえ

教師冥利を感じた
エピソードがある!

教師に感謝を
伝えたい!

「教師冥利に尽きるエッセイ」
を募集しています(12/31まで)

<https://enq.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/smart/eq.asp?U=7002008010390015913>



教師に感謝を伝える「恩師への手紙」
を募集しています(12/31まで)

<https://enq.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/smart/eq.asp?U=2009005024304079901>



2020年4月から募集し、

50件を超えるエッセイと10件を超える恩師への手紙が届きました!

教師冥利に尽きるエッセイを紹介

「最後の担任」@中学校

「合唱コンクール」という、全校生徒の前で合唱を披露し優秀クラスを決定する行事が迫る。練習に後ろ向きな生徒とのトラブルもあったが、担任としてお互いの言い分を聞きながら悩みを共有する中で解決策を探っていった。その後、より練習に励むようになり、本番では優秀賞に選ばれた。教室で生徒たちと対面したときには思わず涙した。生徒から「先生、もう一度みんなで歌いたい」との声が、私は「おう!」と応えた。「教師冥利に尽きる」とはこのような瞬間を表現する言葉かもしれない。翌年は学年主任を任されることとなり、教師生活最後の担任は終わった。翌年度の卒業式当日、生徒から「5年後の20歳にもう一度みんなで合唱したい」との声が、私は「おう!」と応えた。「教師冥利が尽きる」瞬間が再び訪れた。

エッセイの全文は特設サイトで公開中

恩師への手紙を紹介

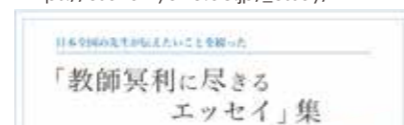
「1分1文字」@小学校

小学6年生当時の私は「字を書くこと」にとっても拘っていた。字を綺麗に書きたい一心で授業の進み具合は関係なく、丁寧に書くことに固執していた。そのため板書を全て書き写すことはできず、ノート提出ができないことが多々あった。それで叱られても、字の綺麗さを、拘りを捨てて早く書くことはできなかった。それが苦しかった。そんなときに教育実習に来ていたM先生は、実習最終日の手紙で「N君が書く1分1文字には驚かされました。誰よりも丁寧に、誰よりも真剣に字を書く拘りは尊敬します。その拘りはN君らしさ、強さ、武器になる。1分1文字、1歩1歩、誰よりもゆっくり前に進みましょう」と言ってくれた。この手紙のおかげで、拘りが強みになり、武器になり、自分らしさになった。

恩師への手紙エッセイの全文は特設サイトで公開中

「教師冥利に尽きるエッセイ」
「恩師への手紙」を特設サイトで公開中!

https://osaka-kyoiku.ac.jp/_essay/



プロジェクトは
まだまだ続きます!

特設サイトでの「教師冥利に尽きるエッセイ」の公開を第一歩に、今後、エッセイの様々な展開を企画しており、教師をめざしている児童・生徒・学生等のキャリア教育のための教材活用もその展開のひとつとしています。ぜひ、公開しているエッセイを未来の教師のために活用ください。



VISIT THE LAB



ラボ訪問

実践から生み出される理論を追究する

「子どもの頃から活字が好きで、外で友だちと遊ぶことよりも家で本を読んでいることが好きな子どもでした。小学生のときは図書室で本を借りて、次の日に返して、また借りての繰り返しの日々でした」と福田先生は記憶を辿りながら話し始めました。

「広島大学に進学し、教育学や教育方法を学びました。所属していた研究室には『辞書とテレコの間』という合言葉がありました。辞書を引きながら英語やドイツ語で書かれた文献を読んで、そこで描かれている教育の理論や実践が、どのような時代状況のなかで展開されたものなのかを含めて研究すること、これが『辞書』の意味する内容。『テレコ』、これはテープレコーダーのことで、学校現場等での教育実践の事実から、何が問題とされ、その問題の解決のためにどのような手立てを

講じられ、その結果として何が生み出されたのかを浮かび上がらせ、理論化していくことを意味している。加えて、ここで生み出された理論を手がかりにして、実践家が次に何を、どのようにすべきかに関する具体的な方針を実践家とともに共同で構想していくことを、『テレコ』には含まれています。こうした『辞書とテレコの間』を往還しながら、教育の原理原則を明らかにしていくことが教育方法学であるという思想に、深く納得したのを覚えています」と振り返ります。

福田先生の研究は、国内外で展開されている教育実践の理論化に挑戦することです。「研究者は実践家が行ってきた実践を実践家と共に理論化する。また、その理論をもとに実践家は具体的な方針を研究者と共同で構想し、再度実践する。それをまた研究者は実践家とともに理論化する。そ

ういう実践家と研究者の共同による教育実践の理論化と、理論と実践の往還関係が、教育方法学には欠かせないのだと思います。また、その実践に基づく理論は、同じ時代を生きる他の子どもに対する実践にも応用することができる。実践を切りひらく、こうした理論化に挑み続けたいのです」と語ります。

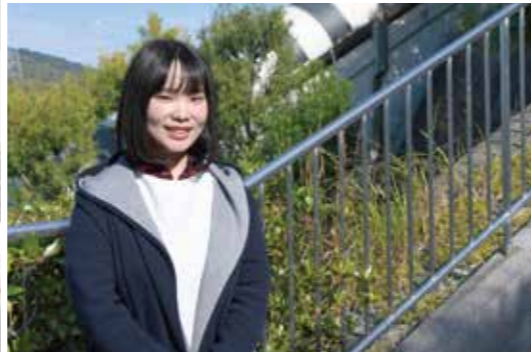
福田先生の研究には、上述した教育実践の理論化のほかに、18世紀から19世紀にかけて活動したスイスの教育実践家であるペスタロッチーの教育実践の研究があります。「その教育実践に取り組もうとした彼の問題意識は、どのような問題と『対決』しようとして、どのように導き出されたのか、その問題意識に対してどのような『選択』が行われたのかを関係づけながら解釈を行わなければならないという考えが、1990年代のペスタロッチー研究の主流でした。要するに、今のような情勢があつて、それに対してどのような課題が隠れていて、その課題に対するどのような対決の方法があり得るのかということを考える教育方法学の研究と同じなんです」と語ります。ペスタロッチーという「古典」は、教育実践における「対決」と「選択」の関係を示すもので、福田先生にとっては時代を超えて常に現代的なものとして読めるものだと思います。

最後に、本学学生について伺いました。「学生には、特に母語ではない他言語で書かれた文献も読んでほしい。例えば、英語の文献で『Learning Democracy in School and Society』という作品があります。日本語で書かれている場合はざらりと読み流しそうなものですが、ここで書かれている『Society』とは何を示しているのかを考えないわけにはいかないでしょう。もし学校と『社会』と訳すのなら、子どもだけの『社会』なのか、大人も含めた『社会』なのか、はたまた地域『社会』のことか、作者は『Society』という言葉にどのような意味を込めているのか、前後の文脈を読みながら1つの単語に対して本気で考え出す。そんな思考回路を、他言語で書かれた文献を読むことで養ってほしい。そうすると、子どもが発する言葉の意味を一面的に捉えることなく、立ちどまって、子どもの背景などを視野に入れて言葉の意味を考えることができるようになるのだと思います。そんなふう言葉大切にすることを自分にも課したいし、教育や福祉に携わる人にはそうであってほしいと願います」

総合教育系
(学校教育部門)
福田敦志
准教授
FUKUDA ATSUSHI



Students Now!



絶えず挑戦し続ける日々

教育協働学科 健康安全科学専攻3回生 **あきづき ひろか** 秋月 寛香さん (私立関西大倉高等学校卒)

「子どもの頃から何にでも挑戦するタイプでした」と語る秋月寛香さん。控えめに話し始めましたが、小学校ではマラソン大会での入賞や縄跳び大会での総合・種目ともに優勝、小学校6年生では応援団長も務め、中学校では放送部として運動会を自分好みに演出、高校では文化祭実行委員会としてクラスの劇の配役の考案や台本を作成するなど、今までやってきた数々の挑戦による経験談が溢れ出てきます。

大阪教育大学をめざし始めたのは高校3年生の11月のこと。「この専攻を選んだのは、『こんな仕事に就きたい』とかではなく、どちらかと言うと健康や防災、心理学、第一種衛生管理者資格の取得に関わる学びができる点に魅力を感じたからです」と語ります。

ゼミは健康安全科学部門・豊沢純子准教授の安全行動学研究室に所属しています。「心理学には小さい頃から興味があり、小学校のときに流行った『心理テスト』の面白さに触れたことが始まりでした。豊沢先生も優しく、ゼミ生のおみなも1回生から知っている同じ専攻のメンバーなので、3回生になりゼミが決まってから初めての対面でもいい雰囲気でした」

今年の9月には、日本心理学会主催の『学部生・高校生プレゼンバトル』で発表を行い、**全国から出場し**

た中で3位に入賞しました。「発表は、この大学ならではのテーマにしようと考え、大阪教育大前駅から大学に向かう3つのエスカレーターが一番に思い浮かびました」。発表したプレゼンの表題は『階段はエスカレーターに勝てるか?』という大教生なら誰もが興味が湧きそうなもの。現状を把握するために実施した調査では、通学時に階段を利用する人は1.7%、しかもその理由は『エスカレーターは混雑するから』などの消極的なもの、という結果。併せて調査した大教生の運動頻度も、WHO(世界保健機関)が提唱している運動量を大きく下回る結果になりました。「日々の運動不足の解消に焦点を当て、エスカレーターと階段の利用を比較したとき、階段を利用したくなるように心理学的に働きかける“仕掛け”を施し、階段を利用する人を増やす方策について発表しました。どうやったら“上りたくなる階段”になるかを真剣に考えました」と語ります。

プレゼンバトルは、例年会場での開催となり、壇上で発表を行うはずでしたが、コロナ禍でそれも叶わず、録画したものを応募するという形式での開催となりました。「会場での発表ができなかったことは残念ですが、このテーマを卒業研究まで発展させ、この大学ならではの取組にしたい。その手始めに、設備更新のためにエスカレーターの1つが一定期間停止することを知ったので、設備を管理する施

設課に相談し、発表した内容を実践できるように進めています。今後は、秋月さんをプロジェクトリーダーに、学生×教職員の協働により、駅から大学に向かう階段に“上りたくなる仕掛け”を施し、運動不足解消につなげる取組を進めていく、とのこと。

最後に本学の魅力を伺ったところ、大学の先生との距離が近いところだと秋月さんは言います。「新型コロナウイルス感染症対策の一環として、生協の食堂で三密とならないような工夫を検討して実際に取り組んでみたい、と先生に相談したら『生協の方に連絡が取れないかあたってみるね』とすぐに対応してくれたり、大学の防災の取組に携わらせてもらえたりと、先生との距離が近いからこそできる経験が多々あります。大学は義務教育ではないので、学ぶことや取り組みたいことは自分次第などありますが、先生との関係性によってその選択肢が広がっていくことを実感しています。だから、本学をめざす後輩たちには、自分のやりたいことを見つけて、先生と仲良く取り組んでほしいなと思います」

教育協働学科の“協働”という言葉が体現するかのような秋月さん。今後もやりたいことを教員や仲間とともに挑戦を続けていくことでしょう。

さらなる高みに向かって学び続ける

学校教育教員養成課程 中等教育専攻 音楽教育コース4回生

みよし みやび 三好 雅さん (私立大阪高等学校卒)

好きなことに対しては理想を高く持ち、努力を惜しまないという三好さん。その反面打たれ弱いこともあり、思っていたようにうまくいかず落ち込んでいた時期に支えてくれた高校の先生に憧れ、先生を志望したと語ります。「学校の先生の役割として、子どもの心の支えになる、というのがあると思います。また、子どもが成長するときに、先生による影響はすごく大きいと感じます。高校のときの先生がそうであったように、自分も子どもの一つの居場所としての役割を果たしたい、と思ったことが先生を志望するきっかけでした」

音楽教育コースを選んだのも、小学校と中学校ではトランペット、高校ではホルンと、楽器演奏に熱中していたことに起因します。「何の教科を教えられるかを考えたとき、小さい頃から続けてきた音楽が好きだったこともあり、音楽の教員免許を取得できる音楽教育コースを志望しました。このコースには、音楽にも教育にも精通している先生方がたくさんいて、どんな些細な疑問にも親身に答えてくれます。先生方は授業時間以外でもピアノのレッスンをしてくれたり、ピアノに触れてこなかった自分にとっては本当にありがたい存在です。学生も、音楽のレベルが高く、先生になりたいという同じ志を持っているので、今後の教育や音楽の研究に関する議論ができる仲間がたくさんいます」。1回生から

同じコースや他専攻の学生と授業等で議論を繰り返し、他の人の意見を聞いて視野が広がり、自分を俯瞰的に見ることで周りが見えるようになったといいます。

2回生から『大阪教育大学コーラスセッション』に所属している三好さん。コーラスセッションは、女声合唱と混声合唱の授業を受講する70名程度の学生で構成されており、音楽教育コースの定期演奏会への出演や、地域の病院での合唱演奏や小学校での合唱指導などを行っています。今まで会長・副会長ともに大学院生が担ってきましたが、三好さんは周囲の人たちに努力が認められ学部生で初めて副会長に任命されました。「今まで院生さんが担ってきた役割なので不安もありましたが、楽器演奏同様、好きで続けてきたことなのでやりきりたいと思います。コロナ禍で対外的なイベントは中止になってしまったことは残念ですが、会長と女声・混声合唱の団長を中心とした他の役員と話し合いながら、日々の練習メニューやスケジュールを組んでいます」

今は、『思考力・判断力・表現力を育成できる音楽の授業』についての卒業研究に取り組んでいます。どうやったら音楽の授業で学力をつけることができるのか、を考え始めたことがきっかけだそうです。「音楽記号のf(フォルテ)の意味を教えるときに、た

だ『f=強く』と示すのは簡単。でも最初に、ある曲の一部分を、明るい感じで歌ってみよう、と提案するとうどうでしょうか。明るいというイメージから自然に大きな声で歌う。そのときに、大きな声で強く歌うことを音楽的には“f”って言うんだよ、と問いかけながら示すだけで、“f”の理解として『明るい感じになる』『大きな声で歌う』『強く』という実感を伴う生きた理解になります」

本学の連合教職大学院に進学することが決まっている三好さん。コーラスセッションでの活動を続けながら、卒業研究の内容も応用し、より高度な学びを展開していきたいと意気込みます。「時代によって求められる能力が変わってくるのが教員だと思うので、自分が今まで学んだ範囲だけで考えるのではなく、新たな学びや他者の意見をもとに常にバージョンアップできる先生になりたいと思います」。自分の限界を決めず、理想を高く持ち、学び続ける三好さん。今の自分に満足し立ち止まってしまうことを戒め、努力し続けたい。そんな姿が、周囲の人たちから認められる一つの要因なのでしょう。

BAGの中身

夢や希望でいっぱいの大教大生のカバンの中を特別に見せてもらいました。

スカートは落ち着かないので、基本的にパンツスタイルです。



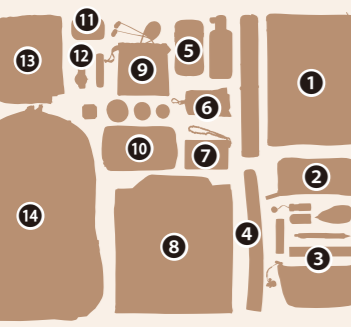
ポジティブがモットー
笑顔がいちばん
まえかわ
前川 あきづさん
学校教育教員養成課程
小中教育専攻
美術・書道教育コース
(書道分野)3年生

ピック
小学6年生のときに趣味でギター始め、小学校での教育実習の最終日に弾き語りを披露しました。

パチ
エイサー太鼓用のパチです。踊れるようになった際に自分で木を削って作ります。軽くて持ちやすい木を選ぶようになっています。

リュック
両手を使いたくてリュックばかり買ってしまう。

ポロシャツ
2年生のときに、サークルの同回生と一緒にデザイン・制作したものです。



- ① 書道の道具 ② 財布 ③ 筆記用具
- ④ エイサーのパチ ⑤ iPhone ⑥ エコバッグ
- ⑦ バスケース ⑧ ポロシャツ
- ⑨ イヤホン ⑩ 化粧ポーチ
- ⑪ ピック ⑫ 腕時計
- ⑬ タオル ⑭ リュック



人と人との繋がりを大切に

課外活動共用施設から太鼓の音と「ヘーシ」と呼ばれる独特の掛け声が聞こえてきます。練習していたのは「琉球舞いちゃりばちよーでーエイサー隊」。練習を仕切り、柔らかな笑顔で踊るのは代表の前川あきづさん。

練習前に前川さんが背負うリュックの中を見せてもらいました。まずひときわ目立つのは、エイサー(沖縄県の伝統舞踊)で使う太鼓を叩くパチです。次に書道の道具、そして女の子らしい筆記用具や化粧ポーチなどが続きます。エイサーの衣装のようにカラフルな小物が所狭しと入っていました。

エイサー隊のことを伺うと、「近畿地区の大学でエイサーを専門に取り組んでいるのは、琉球舞いちゃりばちよーでーエイサー隊だけです。大学の行事や地域のお祭りで踊ったり、小学校にエイサーを教えるに行くこともあります。沖縄の方言「いちゃりばちよーでー」の意味どおり、人と人との繋がりを大切にしながら活動しています」と語ります。

物腰柔らかで、絶えず笑顔の前川さん。「物事をネガティブに受け止めない性格で、落ち込んだとしても切り替えが早いです。将来は子ども一人ひとりに寄り添うことができる小学校の先生になりたいという前川さん、子どもたちにも負けない笑顔で教壇に立つ姿が思い浮かびます。



大阪教育大学 附属学校園ウォッチ

Affiliated School | Osaka Kyoiku University

附属天王寺小学校が新型コロナウイルス感染拡大防止のための取組を全国へ広く公開

附属天王寺小学校が、学校現場における新型コロナウイルス感染拡大防止のための取組として、学校再開前に行った準備内容を同校のウェブページで今年の4月からの休校期間中に随時更新することで、全国の教育現場に参考事例を発信しました。これらの記事を作成するにあたり、「どの学校でも取り組むことができるかどうか」という視点から、手に入れやすい材料を使う、予算的に安価な物を利用する等、内容を工夫しました。学校再開後も、その都度新たな課題に対応し、そのようすを紹介しています。また、これらの取組については、同校の研究会に参加した他校の教員に個別に案内メールを送付しました。

具体的な取組としては、文部科学省から出されている新型コロナウイルス感染症に関する通知をもとに作成した同校の状況に応じた学校再開のためのガイドラインの公開や、学校内の場所ごとの消毒方法をわかりやすく示した消毒マニュアルビデオの公開、新型コロナウイルス感染症対策として30秒間の手洗いを習慣化させるために制作した、校歌をベースにアレンジした手洗いミュージックの公開等、その他にも多彩な参考事例を発信しました。4月以降、取組に関わるページの間覧数は総数で33,146ビュー(令和2年10月30日現在)。

加えて、国立の教育機関としては初めて医療相談アプリ「リーバー」の機能を利用した体温・体調管理機能「LEBER for School」の利用契約を締結し、児童と保護者、及び学校全体の安心・安全の確保に努めるとともに、毎朝の検温による教職員の多忙さを解消しました。



ゼミ室ごぼれ話 第10話 《初等教育部門幼児心理学研究室》



戸田有一先生の幼児心理学(戸田)ゼミに所属するのは学部生5人。幼児教育専攻には、戸田ゼミと、中橋美穂先生の幼児教育学(中橋)ゼミと、加藤あや子先生の音楽表現・ピアノ(加藤)ゼミがあります。1学年が20人に満たない幼児教育専攻では、専攻全体で活動することが多いです。1年生の頃から同回生の横の繋がりはもちろん、先輩・後輩との縦の繋がりを強める機会がたくさんあります。例えば、3年生が中心で行う「ゼミプロ発表会(ゼミプロジェクト演習)」では、ゼミごとにテーマを決めて取り組んだことを、1・2年生の前で発表します。3年生には卒業研究の練習になり、1・2年生はゼミを選ぶ参考になっています。

中橋ゼミは、昨年度に子育て支援施設に行きました。施設の方が保護者の方と関わる時に大切にされていることや、施設の工夫など子育て支援の実践を学ぶことができました。加藤ゼミは、音楽や表現活動を中心に扱っており、ゼミプロジェクトでは幼児たちに芸術に触れてもらえるような音楽劇を自分たちで一から作成し、毎年複数園に公演

しています。戸田ゼミは色んなところに行って、色んな人たちと繋がることが多いことが特徴です。ゼミ旅行で戸田先生の鳥取大学での教える方にお話を伺いに行ったり、「こんなことを知りたい」という私たちの希望のもと、専門の先生を授業に招いてくれたり、直接会えない状況下でも、オンラインで私たちと色々な人たちを結び付けてくれます。伝え聞くのではなく、当事者から直接お話を伺うことで「実感とともに理解できる」「当事者意識が芽生える」「本人に質問することで学びが深まる」と実感しています。戸田先生の人脈の広さの恩恵を受け、私たちの興味関心の幅が広がります。

3つのゼミの横にも縦にも広がる繋がりを大切にしながら、4年間をみんなで締めくくりたいと思います。そのためにも、自分の卒論を進めながら、周りのみんなの卒論からも多くのことを学んで保育現場で生かしたいです!

(幼児心理学ゼミ 多民穂乃花さん 学部4年生)



01 国立の教員養成大学初のネーミングライツ施設開設を記念した式典を開催



国立の教員養成大学初のネーミングライツ施設開設を記念した式典を9月3日(木)に附属図書館本館で開催しました。

ネーミングライツ制度は本年4月、大学の財政基盤強化のため導入したものです。附属図書館本館及び天王寺分館のラーニング・コモンズ「まなびのひろば」を対象としたネーミングライツ公募手続きを経て、8月7日に東京書籍株式会社と協定を締結し、同施設は9月1日以降「東京書籍 Edu Studio(エデュスタジオ)」と呼称することになりました。

本学としては記念すべき初のネーミングライツ施設であり、国立の教員養成大学としても初のネーミングライツ事例となります。

栗林澄夫学長は、「東京書籍Edu Studio内に設置していただいたデジタル教科書体験コーナーや教科書ライブラリーは、今後、教育現場で子ども達の指導にあたる本学学生の育成に大いに役立つ。ネーミングライツを契機とした連携は、教育現場の高度化に資するものであり、日本社会の将来に貢献できる新たな試みとして期待している」と謝辞を述べました。

また、東京書籍千石雅仁代表取締役社長は、「デジタル教科書はGIGAスクール構想の実現において、新たな学びの可能性を広げるツールであり、ここで学んだ学生が日本の教育現場で活躍することを期待している」との思いを語りました。

02 全学SD事業 令和2年度BCP研修「コロナ禍における事業継続」を実施

新型コロナウイルス感染症罹患者の発生を想定したBCP研修を、9月24日(木)にMicrosoft Teamsを活用したオンラインの訓練形式で実施しました。これは、災害を始めとする危機発生時の被害を最小限にし、教育研究活動の速やかな再開をめざすことを目的に作成している事業継続計画(BCP)の改善を図るため、平成30年度から年に一度行っているものです。

今回の研修は、新型コロナウイルス感染症罹患者が学生及び職員から発生するという想定を行い、その状況下における各課・室での具体的な業務を検討するというものでした。事前にどのような危機事象が発生するかは告知せず、研修当日に発生事案の内容及び詳細が各課・室に伝えられました。各課・室では、通知された危機事象に対してどのような対応を取るべきかを検討し、その検討内容や反省点などについて全体共有しました。

本学では、今回の研修を通して検討された内容について、実際に災害が発生した際にも活用できると考えられるため、危機事象発生時の業務ごとのチェックリストを作成し、災害発生時の対策を図っていく予定です。



修学支援事業基金へのご協力について

新型コロナウイルス感染症拡大の影響による経済的に困窮する学生の存在は深刻です。本学では早期に、学生が経済的な理由により修学を断念することなく、安心して学業に専念できるよう、大阪教育大学修学支援事業基金を活用し、「緊急学生支援金」給付を実施しましたが、今後も新たな対象学生の増加や、継続支援とともに新たな支援の必要も予想されます。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

一口 1000円 クレジットカード等によるインターネットでのお手続きとなります

●基金の詳細についてはこちらから▶

大学ホームページ 基金ページ

https://osaka-kyoiku.ac.jp/university/somu/oku_foundation/forstudent2.html



●ご協力をお願いできる場合は

左記のページのこちらのボタンから▶

(寄附)基金寄附支払いシステムF-REGI

※所得税の「税額控除」の対象です。

◎クレジットカード等によるお手続き

インターネット申込

お知らせ 大阪教育大学広報誌天遊(TenYou)は大学ホームページからご覧いただく形に変わりました

大阪教育大学広報誌「天遊」(TenYou)は紙媒体での冊子送付を終了し、大学ホームページから動画なども含めパソコンやスマホでいつでもご覧いただける形に変わりました。

各号の発行毎のお知らせメールをご希望の方はアドレス登録をお願いします。

発行は、大学ホームページ新着情報や公式フェイスブックなどでもお知らせします(年3回発行)。

大阪教育大学 天遊

<https://osaka-kyoiku.ac.jp/university/kikaku/relation/tenyu.html>

メールアドレス登録はこちらから▶



公式SNS アカウント名: OsakaKyoikuUniv



各種イベント、ニュース等を配信しています。是非フォローしてください!

「天遊」とは

「天遊」とは荘子の言葉で、人間の心の中に自然に備わっている余裕を表しています。キャンパス統合移転の記念碑に銘文として刻まれており、揮毫は故水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。「天遊」の読みからとった「TenYou」は、「十人十色、その中のあなた」というメッセージを込めています。

